

「親王御所伝説」と「河津さくら古墳群」

(西長岡史跡研究会)

今から 1000 年ほど前の平安時代。

京の都において、後三条天皇(第 71 代)の二番目の皇子として、実仁親王が誕生した。

母は公卿源基平の娘、基子。弟が輔仁親王である。

実仁親王は幼児から聡明であり、内裏において「いと清らかなるおの子」と称えられる。

そのため天皇の寵愛を受け、皇位継承の期待が高まるものの、藤原氏の系統である貞仁親王(のちの白河天皇)との御位争いの結果、皇太弟に封じられたもう。

さらに、権力を手中にした藤原氏により、迫害の矛先が向けられ始める。

身の危険を感じた 15 才の実仁親王は、業病の疱瘡(天然痘)により落命したと偽り、落北に潜んで幾星霜。御年 31 歳になられた時、ついに東国方面への移住をご決意される。

同行する宮家ゆかりの人々や親族は、総勢 183 名。

8 ヶ月かけて関東の地を踏まれた親王は、都を偲んで駒を止め、しばし上野にお留まりなさる。

み心を察した近習が、御所にふさわしい土地はないかと検分。やがて京の風景に酷似した西長岡地内に入り奏上。親王は「かの地こそ相応しき」と喜び、ここに造営を命ぜられる。

親王は、一帯を長岡の宮と称し、北側の山を御所山、そこを水源とする川を加茂川、あたりの山を愛宕山や西山、そして東山と、都に因む名をつけられたのも雅なことである。

また、親族の菩提を弔う多くの墓を建てられ、日々の墓参を欠かすことはなかった。

その評判は兄の白河天皇に伝わり、畏くも北は滝の入りから笠懸の一部と藪塚、南は生品神社周辺までを安堵賜り、現在も当時の天領が、西長岡地区の長岡寺や神社名義で継承される。

公の文献には秘された実仁親王であるが、母方公家源氏の援助を受け、西長岡の地で 63 年のご生涯を全うされた。(慈眼寺は親王家の菩提寺と伝わる)

周藤家に代々伝わる「手かがみ」は、親王妃輿入れの際、両親より与えられた貴重な鏡である。

時は移り、八幡太郎源義家公の孫にあたる、源氏の嫡流新田義重公が新田荘を開き、

「建武の中興」を成し遂げた南北朝の英雄、新田義貞公へとつながってゆく。

この地に連綿と続く勤王思想は、皇子実仁親王への想いと無縁ではない。

ご遺徳を慕う人々は、御身写しの池やお腰掛け岩、御所椿などと床しく言い伝え、近世に至り文豪田山花袋の作品「野の道」にも記される。

太田市北部、八王子山系に抱かれる西長岡に、かくの如き尊き宮様が御所を造営されたこと。

さらに大古墳群を有するこの地は、隠れた歴史の舞台として大いに顕彰されるべきであろう。

(現在の天神山は、地元の有志により「河津さくら」と「みかん」の里に変貌しつつある)

<西長岡の山麓に点在する、実仁親王ゆかりの史跡>

京八坂神社、愛宕神社、御所跡、御所山見張り台、御身写しの池、正一位三尾稻荷社山皇様、御所稻荷様、熊野神社、加茂川の滝、天神様、菅原神社、お諏訪様、太神宮様若宮八幡宮、高尾山様、長岡寺、植木地藏尊、愛宕神社、浅間神社、慈眼寺、正眼寺天王山、愛宕山、西山、東山、